

由良のゆらゆら回想日誌

アイリスさん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

海軍大臣を父に持つ女子高校生・三好友愛は順風満帆な生活を送っていた。しかしある事件を境に彼女の日常は壊れていく。そんな彼女に転機をもたらしたのは、一人の『妖精』と呼ばれる存在だった……

※艦娘・深海棲艦の設定に独自解釈を含みます

※これはとある少女の復讐劇です

※本作品は作者のSS『抜錨するっぽい!』のサイドストーリーですが『抜錨するっぽい!』を読まずとも分かるように書いています

目次

回想 6	31
回想 5	25
回想 4	19
回想 3	13
回想 2	7
回想 1	1

回想Ⅰ

はじめまして、軽巡洋艦・由良です。

佐世保鎮守府に所属している私は今、呉鎮守府に居ます。呉の沖立提督とその秘書艦・不知火さんは、新たな作戦の旗艦に私を選んだみたいで私は執務室へと向かっている最中。

長い間私と共に苦勞を分かち合った相棒の妖精さんは、私よりも1日先に呉に入っている。

やっと、此処まで来れた。本当に……本当に長い道のりだった。まだ目的は達成できたわけではないけれど、もう少し。もう少しでこれ迄の苦勞も報われる。

まるで走馬灯のように、これ迄の記憶が蘇ってくる。

……ちよつとくらい、感傷に浸ってもバチは当たらないよね？
ねっ？

↓

↓

↓

↓

「お願いっ、三好さん」

教室前の廊下、高校2年生に進級したばかりの私の両手を握って頼み込んでいる眼鏡に黒髪ロングの彼女は、一年先輩の生徒会長。私は「ごめんなさい」としか言えない。

彼女が後輩の私に態々頭を下げて来た理由は、私に生徒会副会長をやって欲しいから。理由は多分だけど、私が1年生の間一度もテストで学年総合一位を譲らなかつたからだと思う。

別に生徒会に入るのが嫌、ってわけではない。でも父さんが『生徒会など所詮お遊びだ。下らない』って言って許可してくれないだろうから。

「そこをなんとか」

「でも先輩、多分父さんが許してくれないから」

父さんという言葉を出すと先輩は「あー、それなら仕方ないよね。ごめんね」ってアツサリ諦めてくれた。どうして父さんにそんな力が有るのか？有るに決まってる。だって私の父さんは、現役の日本の海軍大臣だから。

「三好さん、もし大丈夫になったら是非考えてみてね！」って言って右手を振って自分の教室へと帰っていく先輩。廊下を走りはせずに当然徒歩で、だけどね。

ふう、って息を吐いて、私はやっと教室へと戻った。もうすぐ昼休みの時間も終わっちゃうし、少しゆつくりしたかったんだけど。

「おっ、友愛（ゆあ）、やっと帰ってきた。もしかして大きい方だったの？」

ちよつと下品な発言をしてる、一つ前の席に座る彼女は私の友達のたまき。彼女とは小学校からの付き合い。え？トイレに行ってたのか？もうっ、どうしてそういう事を聞くの？

「ちよつと廊下で生徒会長に捕まってるね」

「あー、ならしやーないか。成績優秀、容姿端麗な上にスポーツ万能だかね、友愛は。で？どうせ断ったんでしょ？」

成績は兎も角、容姿端麗っていうのは……私よりも綺麗な人なんて幾らでも居ると思うんだけど。現に母さんは私より全然綺麗だし。

「うん、先輩には申し訳ないけどね」

答えた私はそのまま自分の席に座る。ええつと、次の授業は物理だったよね？教科書出しておこうかな、つと。

……あれ？何だかいつもより周りが騒がしい気がする。何かあったのかな？

「何だか騒がしくない？」

その私の疑問にたまきは答えてくれる。「あー、そうそう！校門に高級外車に乗った爽やかイケメンが居るらしいよ！」って。高級外車に……爽やかイケメン……あー、ちよつと嫌な予感が……

「ねえ、その外車ってひよつとして●●●●じゃない？」

「うおっ、何で友愛が知ってるの？……あーそうか、例の爽やかイケメン、友愛のダンナかあ、なーんだ、残念」

ダンナ、つて言い方はちよつとどうかと思うんだけど。せめて彼氏とか……まだ結婚するつて決まったわけじゃないんだし。

「ホラホラ、騒ぎになったままだと面倒っしょ？まだ休み時間残ってるしダンナを説得に行つてきなよ」

「はあ……分かった。もし授業間に合わなかつたらたまきが先生に説明しておいて。ねっ？」

「へいへーい」つてヒラヒラと右掌を振つて、たまきは私を見送る。本当は校則違反になるけど、時間もあんまり無いし私は小走りで廊下を走つて、校門に向かう。後でたまきが言つてた事だけど、男の人の所へ向かう私の姿を見て男子生徒が何人も溜め息をついてたつて。ほんと、たまきはいつも大袈裟なんだから。

「石川さんっ！学校には来ちゃ駄目つて言つたのに！」

「いや、偶々近くに来る用事があつてね、友愛がちゃんと勉強してるか気になつたんだ」

苦笑いの石川さん……石川敬治さん。父さんが決めた、私のフィアンセ。私の10歳年上で、父さんの優秀な右腕。帝大……つて言つても分からないか。そつちの世界で言う所の東京大学みたいなもの……卒のエリート。

今は軍の艦娘・深海棲艦研究部門の責任者。将来的には父さんは自分の後を継がせて海軍大臣に推そうとしてるみたい。彼は今はその気は無いみたいだけど、父さんに言われたらやらざるを得ないかも。私は一人っ子だし余計に。ねっ。

「制服姿も可愛くていいね。男子生徒に友愛のミニスカート姿を見られるのは少し妬けるけどね」

「もうっ、またそんな事言つて……ここに居ると騒ぎになつちやいますよ？」

敬治さ……石川さんは別にロリコンとかそういう類いの人じゃない。彼と初めて会つたのは私がまだ中学生の時。父さんが突然彼を家に連れて来て『彼は友愛のフィアンセだ』つて宣言した。勿論当時の私は反発した。だつてそうでしょ？私だつて人並みに恋をしただりしたかつたし、こんな10歳も離れた見ず知らずの人となんてやつ

ていけるわけ無い! って思ったもの。

でも彼は凄く紳士的だし優しいし。まあ年齢的な事も有るんだろうけど私に手を出したりって事はしてこない。キスもまだだし。

それに、私の勉強も見てくれる。私が県内有数の進学校で総合一位に居るのは、彼の力も大きい。この分で行けば私も彼の後輩になれるかもね。

「分かったよ。それじゃ友愛、また放課後にね」

「はい、放課後に……って、今日は早いですね?」

いつもなら、彼と会えるのはもつと遅い時間。今日は早上がりなのかな? ……ちよつと嬉しい、かな。

「ああ、ちよつとね」って言って、彼は車に乗り込んで走り去っていく。その場で立つたまま彼の車を見つめていた私の表情は、言うまでも無く緩んでいた。そう。初めは強制された関係だったんだけど、今では私の方が彼に惹かれている。高校卒業と同時に結婚でも構わないかな、って思うくらいには。父さんと彼は大学くらいは卒業しろって言うだろうけどね。

そうして少しの間ボーっとしていた私の耳に、聞き慣れたチャイムの音が聞こえてくる。いっけなーい! 授業開始のチャイム!? 本当に遅れちゃった!? 我に返った私は、急いで走って教室を目指した。



私の家は、周りを大きな門付きの塀に囲まれた明治時代の豪邸って感じの、三階建て。近所からも目立つこの家は、子供の頃の私には少し恥ずかしいものだった。勿論今はもう慣れたもの。

「何だど!? 陸奥と武蔵が轟沈だど!? 木村は何をしていた!!」

家に帰るなり、玄関の向こうから父さんの怒号が聞こえてきた。急過ぎて良く聞き取れなかったけど、何か大変な事が起きたのは私にも分かる。

そーつと扉を開くと、電話を片手にまくし立てる父さんの姿があった。その表情からは怒りと焦りが見える。

「あの……ただいま、父さん」

恐る恐る挨拶を交わす私を見て、右手で『あっちへ行っている』と

ばかりにシツシツとジエスチャーをしている。やっぱり何かあったんだ。

「クソツ、深海めっ！」とか「敵のデータを集めろ、今すぐにだ！」とか叫ぶ父さんに背中を向けて、自分の部屋へ。鞆を机に置いて着替えようとした丁度その時、私のスマートフォンが鳴る。石川さんから。頬が染まるのが分かる。私は手を伸ばして、直ぐに電話に出た。

「石川さん？」

「友愛か。今すぐに会えないかい？」

今すぐに？あ、そつか。父さんの様子からして石川さんも軍から呼び出しを貰ったのかも。事が収まるまで多分会えなくなるんだろうな。はあ……ちよつと残念。深海棲艦なんて居なくなればいいのに。

「すぐに行きます」

私は急いで制服を脱いで着替える。ゆっくり服を選んでいる時間なんて無い。もし軍の呼び出しなら、あまり時間は残されていないもの。

小走りで外へ。父さんを迎えに来たらしい石川さんは、車を私の家の前に止めた状態で待っていた。良かった、間に合った。

「石川さんっ」

「暫く会えそうになくてね。友愛の顔だけでも見ておこうと思ってね」

家の前にも関わらず私と石川さんがこんなやり取りをできる理由は、父さんの支度は何時も時間が掛かるから。とは言つてもそんなに余裕が有るわけではないから、あんまりイチャイチャは出来ない。

「頑張ってくださいね」

「ああ、頑張るよ」

彼は微笑みかけてくれる。もうっ、貴方がそんなだから……私の方が我慢出来なくなる。

私は意を決して、彼に向かって一歩踏み出す。身長の高い彼に合わせるように背伸びをして、その唇に私の唇を重ねた。

時間にすれば、多分ほんの1、2秒くらいだったと思う。でもその

時の私にはそれでも充分。心臓がドキドキして破裂しそう。でも、今までに感じた事が無いくらい幸せな気持ち。

彼の方は驚いた表情してる。でもすぐに笑顔になってくれた。「これで暫くは頑張れそうだよ」って頭を撫でてくれる。もうっ、そこはキスを返してくれても良いのに……って、そうだ、家の前だったんだよね。父さんは……まだ来てないみたい。見られなくて良かったあ。

私がキスをしてから数分後。父さんと石川さんは仕事へ。行っつらっしやい。今度はちゃんとキス、しようね。ねっ？

それが、敬治さんと私の最初で最後のキスだった。

回想2

2年生の中間テストが近付いてきた、ある日。

私は学校を終えて歩き慣れた通学路を帰宅している途中だった。

私の家は閑静な住宅街を抜けた先にある。その道に並ぶ家々の住人達が、何時にも増して騒がしい。家の外に出て何やらヒソヒソと話している姿がアチコチに見える。何かあったのかな？

……あれ？住人達の視線、私に向いてない？変な所は別に無い……あ、漫画みたいにスカートが鞆に挟まって捲れてるとか!?

慌てて後ろに手を回して確認する。良かった、捲れてはいない。ならどうして？

よく考えてみたら、住人達は私が帰ってくる前から外に出ていた。それで私の姿を見かけて視線を向けるって事は……まさか私の家に何かあった!? 火事? それとも強盗か立て籠り犯とか!? 母さんは元々身体が強くなって、昨日から熱を出して寝てる筈! 母さんに何かあったら……!!

私は慌てて走り出した。急いで帰らないと! 母さん……!!

けれど、私の予想はどれもハズレだった。息を切らせて駆けつけた私の視界に映ったのは、私の家を取り囲む雑誌やTVの取材記者やカメラの数々と、規制線を張ってそれらを止めている警察と軍事警察の両組織。

でも呆氣に取られる暇はなかった。私の姿を見つけるや、向けられるカメラとマイク、録音機。「今のお気持ちを一言!」とか「お父さんのしていた事は知っていたんですか?」とか、記者達が一斉に質問してくる。フラッシュが一斉に焚かれ、酷く眩しい。混乱した私は「あの、えっと、あの」って言葉にする事しか出来ない。

兎に角その場から逃げたくて、質問に答えずに記者達を掻き分け走って、追ってくる記者を振り切り規制線の内側へ。門の中へと走ると、大きなトラックとそこに私の家にある物を運び込んでいる多数の捜査員が居た。

「え……なに……これ……」

誰にでもなく眩き立ち尽くしていた私。そんな私の方へ近付いてくる黒髪の女性が一人。警察か軍事警察の人かと思っただけど、黒の詰襟の軍服にミニスカートという周りの人達とは違った格好をしている。軍人……にしても妙。

「あの……えつと」

上手く言葉が出て来ない私に、彼女は「令状ならこの通りあるであります」と令状を広げ私に示す。家宅搜索って、それじゃまるで犯罪者じゃ……。

「つかぬ事をお聞きしますが、貴女の父上からは何か聞いておりませんか？」

「何か……って？」

父さんって……父さんが何かした、って事なの？そんなの何かの間違いに決まってる。だって父さんは人類の敵である海の化け物、深海棲艦と長年戦って来た海軍なんだもの。そんな父さんが犯罪なんてする筈は……。

「おのれ謀ったな、あきつ丸！陸の仕業か！」

聞こえてきた父さんの声に反応し後ろを振り返る。両手に手錠をかけられた父さんは、その「あきつ丸」って詰襟の制服の女性を睨んでいる。父さんは、今まで見たことが無いくらいの怖い表情。

「心外でありますな海軍大臣殿。否、今や『元』大臣殿。陸の上層部はおろか、歴代の総理にも同様に逮捕状が出ているでありますよ。これは我々艦娘と提督殿達の総意であります」

あきつ丸さん？の言葉に驚愕し、けれど何かに思い当たったらしい父さんは「……そうか！曙とあの若造の仕業か！ならば糸を引いているのは呉の東郷だな！……おのれ、おのれ……！」って恨み節を吐いて、そのまま連行されていった。

その場で呆然としていた私。ハッと我に返った。そうだ、母さんは！?

あれもこれも持ち出され、すっかりガランとしてしまった家の中。母さんは寝間着のままソファに座ってボーッとしていた。「母さんっ！」て叫んで近寄った私は、その姿を見て青ざめた。顔は青く、身体

が震えている母さんの額に手を当てると、酷い熱だった。

「母さん、寝なきや駄目だよ！」

無理矢理肩に手を回して、母さんを寝室へと運ぶ。体温計で測ってみると、39.8度ある。今朝より2度も上がってる。きつとこの状況のせいだ。あのあきつ丸とかいう人のせいだ。

氷枕を作って、母さんに薬を飲ませて眠らせて。私は廊下に投げ出していた鞆をやっと拾って、自分の部屋へ。何時の間にか夜になっていた。外は相変わらず騒がしいままで、記者達が帰る様子は無い。着替えもせずに制服のまま、私はベッドにうつ伏せに倒れ、そのまま眠り込んでしまった。



気が付くと、朝になっていた。そうだ、母さんは？気になって寝室へ向かう。母さんの熱は……下がってはいない。心配だけど学校、行かなきゃだよね……。氷枕だけ代えて、薬と水を枕元に置いて。お風呂……シャワーだけでも浴びないと。

学校……行っても大丈夫、だよな？

身体も頭も、重い。

身支度は終えたけど、何か口にする気にはなれない。外には……まだ記者達が張ってる。

家から出るなり、昨日同様私にカメラやマイクが向けられる。私は逃げるように早足でその場を後にする。

学校へ着くまでの間、私には刺すような冷たい視線が向けられ続けた。まるで私以外は全員敵になったかのよう。とてもじゃないけど耐えられない。早く、早く学校に着いて。お願い……。

……やつと着いた。校門をくぐり、昇降口に入るという所で担任の先生に呼び止められて職員室の隣の応接室へと通される。

内容は簡単だった。学校の外には私目当ての記者達が張っていて迷惑している事。それと今日はこのまま帰れ、って事と……出来れば自主退学して欲しい、って事。

私に弁解の余地は与えられなかった。学校にも面子があるのだそ

う。つまり、今の私は学校にとって邪魔な存在。

話の後、私は記者を避けるように裏門から学校を出た。応接室までは堪えたけど、もう我慢できない。泣きたい。私が……私が何をしていたっていうの？昨日の帰宅まではいつもの日常だったのに。父さんは、一体何をしたの？

早く帰ろう。帰って眠ってしまおう。そうすれば、少しは気持ちも落ち着くかも知れない。

帰りの道中も、冷たい周りの視線が突き刺さる。そっか、私、昨日カメラで撮られたものね。きつとテレビにも出たんだ。それで私の姿を見て……。

でも。例え親が横領とか贈収賄で捕まったとして、こんなに冷たい視線を向けるものなの？みんなまるで……まるで親の仇でも見ているかのよう。

周りの視線に晒されながら、家へと急ぐ。もう少し行けば、人通りも少なくなる。視線からは逃れられる。あの角さえ曲がってしまえば。

T字路を右に曲がって、走る。普段なら私は絶対に通らない細い道だけど、昼間でも人が殆んど居ないあの道は近道。

それが、良くなかった。

細道を半ば程まで進んだ私は、突然後ろから左手を掴まれた。尾行されてるなんて、素人の私に気付ける筈無い。あらゆる人の視線を集めていたんだから余計に。

スポーツが出来るって言っても、大人の男の人の力に敵う筈なんて無い。抵抗する事も出来ずに呆気なくその場に押し倒され、私の両手は相手の男に片手で押さえられる。暴漢!?

恐怖で震えながら、まだ自由な足をジタバタと動かしてもがく。偶然にも私の右足が男の股間に当たって、暴漢が倒れ悶える。逃げなきゃ。私はその一心でその場を離れる。辛さで泣きながら、無我夢中で走る。

どうして……どうして私がこんな目に。助けて敬治さん……。

……あ。

父さんが逮捕されたのなら、その右腕だった敬治さんは……？敬治さんっ。

彼に会いたい。今すぐに。お願い、私から敬治さんまで取らないで。

まだ震える足を動かして、彼の家へと走る。せめて彼の胸で泣きたい。会いたい、会いたい、会いたい。

彼の家に着いて、インターホンを鳴らす。けれど、反応が無い。彼のスマートフォンに連絡してみても、返事はない。もう一度インターホンを鳴らす。

やっぱり反応が無い。まさか彼ももう逮捕されて……。彼を失う恐怖で、全身が震える。恐る恐るドアノブに手を伸ばす。鍵は掛かっていなかった。私は家の中へと入り彼の姿を探す。嫌な予感が、する。

私の足は、無意識にリビングへと向かう。扉を開いた私は、その場に力無くへたり込んだ。

敬治さんは、天井の梁から首を吊って自殺していた。へたり込んだまま、声も出せず、私の瞳からはポロポロと涙が流れる。

嘘だよ……嘘だって言って……嫌……イヤ……私を置いていかないで……

「……イヤ……嫌アアアアアア!!」

彼の足元に置かれた遺書に気がついたのは、すっかり夜も暮れた頃。そこに書かれていた事は。

父さんが歴史上最初に現れた深海棲艦『南方棲戦姫』を産み出した海軍のプロジエクトに参加していた事とそのプロジエクトの詳細、敬治さんはその事実を知りながら研究部門の責任者になって前任者と父さんの意向を踏襲した事と、私こと友愛は一切この事実を知らないし関与もしていない事と、それと私宛に『友愛はまだ若い。幾らでもやり直しできる。だから僕のような人類の敵、犯罪者の事は忘れて幸せに生きて欲しい』と書かれていた。

違うよ……違う。私は、何時までも待ったのに。

例え敬治さんが犯罪者として逮捕されたとしても、貴方が戻ってくるまで待ったのに。もう貴方無しの人生なんて考えられなくなっていたっていうのに。

どうして……どうして私を置いていったの？どうして一言言ってくれなかったの？

母さんの事もあるし、帰らなきゃいけないのは頭では分かっている。けれど私は、日付が変わって再び日が昇るまでその場から動く事が出来なかった。

回想3

明るい。夜、明けたんだ……。

玄関の方から音が聞こえて、それが近付いてくる。数人の足音。振り返ってみると、3人の男の人が立っていた。その手には逮捕令状。敬治さんを逮捕しに来た警察の人達だった。

私と敬治さんの様子を見て状況を察した警察は、鑑識を呼ぶ。それと事情を聞くため、私は警察所へと連行される。

警察は、泣き腫らした目をしてへたり込んで動けないでいた私が敬治さんを殺したとは思ってないみたい。簡単な事情聴取を受けて、念のために指紋を採られただけで解放された。敬治さんの死は自殺と断定。遺書の筆跡や自ら首を吊った事も確認された。

でも。

……それが？だから、なに？

彼の死が自殺だろうと他殺だろうとどうでもいい。問題は彼が『もう居ない』という事実。

私、どうしてもっと早く敬治さんのところへ行かなかったんだろう。学校なんて行かずに真っ直ぐ敬治さんに会っていたら、彼は死なずに済んだかも知れないのに。警察がもっと早く動いていたら、彼は死なずに済んだかも知れないのに。

心に空いた大きな穴は、時間が経てば経つほどに大きくなっていく。帰る間中、涙が溢れて止まらない。

肩を落とし、俯いてトボトボと家へ向かって歩く。家に母さんは居ない。私が事情聴取の時に母さんを病院へ連れて行ってくれるように頼んだから。今の私が冷静に母さんの看病が出来るとは思えない。私だって一杯一杯なもの。家族の事ですら気にする程の余裕なんて無い。

帰り道の道中、道行く人達に「失せろ犯罪者！」とか「人類の敵の癖に道を歩くな！」とか罵倒される。子供にすら「死ね」とか「あっち行け！」とか罵られる。石を投げられたりもした。

家に着くと、今まで取り囲んでいた記者達は居なかった。私の婚約

者が自殺、つてというのが響いたらしくて、記者達は警察の方に行つて
るみたい。

やっと静かになった規制線を潜った私は、呆然としていた。私の家
を囲む壁には『死ね』とか『人類の敵は消えろ』とか一面に落書きが
してあった。

どうしてなの？私は……生まれてはいけなかったつていうの？
もう死ねつていうの？

私は家に入るとリビングのソファに倒れ込むように座る。そこか
らどうしたのか記憶は無い。ただ、気付くと夜中の零時になつてい
た。

ふと外に目を向ける。満月だった。敬治さんと二人きりだったら
綺麗だと思つたかも知れない。でも今は、そんな余裕ある筈もない。

どうしてこんな事になつたんだっけ。私の人生が今まで順調過ぎ
たからなの？誰かが言つてた。人間の幸運の量はみんな同じだつて。
悪い事があつても、その分良い事があるからプラスマイナスゼロにな
るようにできてるつて。だから、私にも一氣に不幸が起きたのかな。

力無く、フラフラと立ち上がり。何となくテレビをつけた。何処の
番組も、父さんの犯罪を糾弾する特別番組。人類の敵である深海棲艦
を産み出したのは父さん達で、その犯罪がやつと裁かれるつて内容ば
かり。その所謂『クーデター』とも言える逮捕劇を主導したと思われ
る横須賀鎮守府の木村提督の声明も流していた。

もう、この家に居ても仕方無いのかも知れない。これからは何処か
誰も知らない土地で、せめて母さんと二人で静かに暮らそう。そう思
いながら、テレビをつけたままボーツと見つめていた。明日からは母
さんの居る病院に置いてもらえないかな。少なくともここに居るよ
りは静かに過ごせるだろうから。親戚はみんなあてにならない。人
類の敵、犯罪者の娘である私を匿つてくれる人は誰も居なかつた。そ
れどころか「二度と連絡をしてくるな、犯罪者！」つて罵られる始末
だった。

それから一睡も出来なかつた私は、着の身着のまままで日の出と共に
家を出た。

まだ朝も早いせいもあって、人通りはまばら。私への敵意の籠った視線も殆んど無い。少しだけ有り難みを感じながら、母さんが入院した病院へと歩く。

足は重い。身体も思うように動いてくれない。

もしもこの前みたいに暴漢に襲われたらひとたまりも無いだろうけど。

何事も無く病院へと着いた。プロだからか、それとも父さんと私は別と思っているからなのか。看護師さんの私への態度は他の人へとそれと変わらない。別に私に特別優しくしてくれてるわけではないけれど、久しぶりの普通の対応に泣きそうになった。

母さんが入院しているのは二階。何日か寝泊まりしても大丈夫だっけと言われてホッとした。母さんと一緒なら、少しは落ち着いて眠れるかも知れない。



翌日……というより明朝の3時。私は目を覚ました。病室の母さんは当然だけど眠ったまま。私が昨日眠ったのは……何時頃だっけ？夜中零時は回ったと思うけど。

あんまり眠れてはいない。何となく病室から出て待合室へ。

誰の姿も無い部屋の中。何も考えず……じゃなくて何も考えたくなくて椅子に座って外を眺めていた。

「三好さんっ」

看護師さんの1人が私に声を掛けた。何だか逼迫してる声……まさか母さんに何かあったの!?!もしも母さんまで居なくなったりしたら私は……。

それは母さんの事では無かった。父さんが獄中で自殺。つけられたテレビにも、緊急速報で流れていた。

父さんが自殺?どうして父さんまで?深海棲艦を作ったのが父さん達だったとして、父さんや敬治さんを逮捕する必要なんて何処にあるの?父さんや敬治さんに責任を取らせて、何が変わるっていうの?現に父さんや敬治さんは人類の為に深海棲艦と戦っていたじゃない。

母さんに伝えなきゃいけない。でも今の母さんに言っただ大丈夫な

の？体調が悪化したりしたら。

私の予感当たってしまった。父さんの死を知った母さんの体調は、みるみるうちに悪化していった。初めは風邪だった筈なのに肺炎になり、そのまま。本当なら治る筈の投薬や治療もその甲斐無く。病は気から、とはよく言ったもの。殆んど寝ずに看病していた私の体調を心配したのか、看護師さんに一端家に帰るように言われた。

食事も殆んど喉を通らず、少しの水分しか摂っていなかった私も倒れるって思ったんだと思う。すっかり寝れた私は、鈍い足を引き摺るようにして病院を後にせざるを得なかった。

更に落書きが増えた外壁。私が居ない間に石でも投げられたのか、割れている窓もある。もう嫌。家に帰らなければ良かった。こんな何も無い、周りの人に恨まれた場所で休める筈なんてない。

すると、病院から電話が掛かってきた。内容は………母さんが亡くなったという事実。

………

もう、いい。

息をする事さえ辛いのに。

母さんまで居なくなつた今、もう生きていても意味が無い。

死のう。

どうせ死ぬなら彼の死んだ場所で。せめて大好きな彼の家で。

私は衰弱した身体に鞭を打って、残った力を振り絞り彼の家を目指す。指をさされ罵られ、『お前も早く死ね』『何処かに消えろ』という言葉に耳を塞ぎながら歩く。

通りすがりの人に突然右頬を殴られ、私は大きく体勢を崩してその場に倒れた。私の膝や足、腕には擦り傷。頬は腫れてるみたい。

「お前らのせいで何人犠牲になったと思ってるんだ！」

「そうだ！失せろ！」

「人類の敵は消えろ！」

「ウチの家族を返せ！」

私は、這うようにしてその場を逃げ出す。勿論助けしてくれる人なんて居ない。このまま此処に留まったら、この人達に殺される。死ぬのは構わない。でもそれなら彼と同じ場所で。彼を感じて死にたい。ここでは、まだ死ねない。

やっとの思いで、彼の家に着いた。心身共に衰弱しきった今の私には本当に長かった。

合鍵で扉を開けると、中から声が聞こえてきた。誰か、いるの？

声のするリビングへとゆっくり近づく。強盗の類いではなく、声の主はテレビだった。家主が居なくなつて電気が止まつた筈の家のテレビがついている。どうして？

テーブルの上には、リス位の大きさの人形がちよこん、と座っていた。父さん達の犯罪を糾弾する番組が流れるテレビを見ていた、赤みがかつたボブヘアの、セーラー服を着た二頭身の人形が。

その人形が、突然私の方を向いた。ううん、人形じゃない。どう見ても生き物。小人……じゃなくて、まさか敬治さんが言っていた『妖精』……？

『ニンゲン、ですか』

その妖精は、私に興味を持っている様子は全く無い。確か敬治さんは、妖精が見える人間には艦娘の才能があるつて言つた筈。つまり……私にも艦娘になれる力があるつて事。にも関わらず、目の前の妖精はアクションを起こさなかつた。私と同じで全てに疲れた、という表情で番組を見ているまま動かない。

でも。妖精を見付けた私の方は違つた。私なんかでも艦娘になれる？敬治さんは言つた。艦娘や深海棲艦には、人類の作つた兵器の一切が通じない。アメリカの作つた核爆弾すらも。ダメージを与えらる事が出来るのは、妖精が作つた艦装のみ。そしてそれを扱えるのも艦娘だけ。

つまり艦娘になれば、父さんや母さんを、愛しい敬治さんを奪つた奴等に私でも制裁を加えられる。非力で弱い私でも、仇を討つ事が可能になる……。

……やっぱりまだ死ねない。死ぬのは私を虐げた、私の大切な人達を奪った、私の愛しい人を追い込んだ憎き人間共に復讐したあと。人間共を皆殺しにしてから、敬治さんの仇を討ってからでも遅くない。

それには先ず目の前の妖精を説得して味方に……ううん、利用できる道具になってもらわないと。うまく丸め込まないと。

ぽっかりと空いていた私の心の大きな穴に、復讐という名の炎が灯る。それは一気に私を覆い尽くし、死を待つだけの筈の私に生命力を与えてくれた。

思い出して、私。私の第1目標は……ええと……そう、木村提督、それと東郷と若造、それからええと……そう、曙。絶対に忘れない。彼らを殺して、日本人も根絶やしにしてやる。

私に宿っていた艦艇の魂の名は……軽巡洋艦・由良。

回想4

『ニンゲン、ですか』

彼？彼女？どっちでもいいか。説得するのは簡単では無いのは分かる。その妖精は、人間を信用していない目をしてる。

無難な言葉から入っても、きつと会話は成り立たない。それならいつその事私のやりたい事を話してしまうべきかも。所々ぼかして話すけれど。

「私はね、人間に復讐しようと思ってる」

妖精が、一瞬私に視線を向けた。手応えありね。という事はきつとこの妖精は、人間をろくでもないものと思ってる。そして、そういう考えに至る出来事があつたって事。先ずはそれを聞き出す。

『無意味ですよ。復讐した所で、貴女達人間は何も学習なんてしません』

よし。私の話に反応はしてくれてる。第一歩。あとは上手く言いくるめるだけ。スピーチコンテストにも何度も出た私の腕の見せ所。ねっ？

「確かに無意味。でも、私は人間達に学習して欲しいなんて思っただい」

『……………それなら、どうして？』

来た。きつと今までは『そんな事無い！』って妖精に考えなおしてもらおう方向で説得しようとした人間が殆んどだったんだ。だから、私みたいな考えの人間は初めての筈。

「多分貴女と同じ。人間は滅びるべきだと思ってる。勿論、全てが終わったら私も死ぬつもり」

悩んでる悩んでる。そうよ。そのまま。

「私はね、大切な人達を奪われた。貴方は？」

『……………私は』

妖精が昔の身の上話をしてくれた。復讐、それに大切な人を奪われたってというのが少しかも知れないけれど共感を呼んだみたい。私の目が本気だったのもあると思うけど。

妖精も、艦娘も、深海棲艦も居なかった当時。

父さん達が最初に生み出した深海棲艦、南方棲戦姫は、元々は人間の女性だった。その彼女に戦艦大和の魂を降ろし、人の手で『艦娘』を生み出す。それが、父さん達のプロジェクト。人間大の大きさをレールでも発見は非常に困難、ある程度の支援があれば隠密に単独作戦行動も可能、その戦力は超弩級艦に匹敵する、海戦の概念を根底から覆す兵器。

でも、プロジェクトは失敗。実験に参加した女性は海の藻屑と消えた……筈だった。それが、深海棲艦として甦ったのが南方棲戦姫。

人類は追い詰められた。総力を結集した国連軍ですら壊滅。深海棲艦は瞬く間に増えて人類は制海権をあっという間に失っていき、世界は分断されていく。

そんな時に現れたのが、目の前の彼女？を含む三人の妖精と、その妖精達に見出だされた三人の、初期の艦娘。彼女達三人は妖精達と力を合わせ、南方棲戦姫を見事撃沈する事に成功する。

その時の三人、初代の駆逐艦漣、駆逐艦雷、駆逐艦吹雪は『英雄』と呼ばれ、私も幼い頃から聞いていた世界の誰もが知っている英雄譚。

でも、それは一般的に出回っている話。本当はもっと狡猾で残酷だった。

実験体として、後に南方棲戦姫になった女性。彼女は、初代駆逐艦雷の実の母親だった。そして実際の戦闘はというと、手も足も出ない艦娘達。吹雪はたった一撃で大破し、漣は戦意喪失。雷の捨て身の特攻、自爆攻撃でどうにか撃沈に成功したという有り様だった。

そして、その作戦を指示した当時の司令官は、雷の実の父親。つまり当時の大本営は実の父親に娘に「母親を殺せ」と命令させてたって事。

負の連鎖は止まらない。南方棲戦姫と共に沈んだ雷は、後に『戦艦レ級』という最低最悪な深海棲艦として吹雪、漣の前に立ちはだかる。

そんな負の連鎖を生み出してしまった責任、雷を死に追いやってしまった、実の母親を殺させてしまった事への懺悔、他の二人の少女にも絶望を味わわせてしまった後悔。それからそんな残酷な事を平気

で行える人間への憎悪と軽蔑。それらの感情を背負ってしまったこの妖精は、一人海軍を離れ誰とも関わらず静かに過ごしていたみたい。

でも。だから何？私が同情するだけでも？だから父さんが死んでいって事にはならない。母さんが病死していい理由にはならない。あの人が自殺する理由になんてならない!!それなら、父さんが自殺しないように監視してくれていれば良かったじゃない！母さんを保護してくれたら良かったじゃない！あの人だって直接は関係ない！私から大切な人を奪っていい理由にはならない!!当時の駆逐艦雷と今の私、何も違わないじゃない！

父さんだって時の総理大臣に利用されただけかも知れないじゃない。母さんが死んだのは間違いなく仇共のせいだし、敬治さんだって後悔して必死に深海棲艦と戦っていたじゃない！それに私の事だって！何も関わっていない、何も知らない私を追い詰めた人達は!?父さん達が裁かれるなら、私が彼らを……人間や艦娘、提督達を裁いてもいいって事よね!!

そんな感情を全て押し殺し。私はできる限り冷静に口を開いた。

「それならなおの事。人間は滅びるべき。私に手を貸して。貴方が手を貸してくれれば、きっといつか愚かな人間達を滅ぼす手段が見つけられる」

妖精は、悩んでる様子だった。けれど私の提案を飲んでくれた。でも私にはわかる。この妖精は、私を上手く利用すれば人間に制裁を加えられるかも知れないと思って乗ったんだ。けれどそれでも構わないじゃない。だって私もそうなんだから。私が利用された所で、最終的に目的が達成されればいい。多分向こうもそう思ってるんじゃない？私が三好友愛って名乗っても妖精が決心を変えなかったのがその証拠。

「それじゃ妖精さん。早く私を艦娘にして。奴等をこの手で殺してやるから」

『それは無理です』

どうしてっ!!協力してくれるって言ったじゃない!無理ってどういう意味なの!

『良いですか。貴女の内包している艦艇の魂は、私が感じる限りでは軽巡洋艦由良です。軽巡洋艦という艦種についてはわかりますか?』
けい……じゅんようかん?艦種?何、それ。軍艦って幾つも種類があるって事?まさか、だけれど、私の艦娘としての力は弱いって事……?』

『それについては艦娘になれば分かる事です。それに艦娘の装備を揃えるには民間では限界があります。貴女の練度も上げなくてはならない。海軍に入ります』

海軍に入る?馬鹿な事言わないで!私から敬治さんを奪った人達と一緒に生活しろっていうの?あいつらと同じ空気を吸えって事?冗談じゃない!

『落ち着いて下さい。先ず貴女は栄養を摂って下さい。見るに堪えませんが……』

……そうね。生きると決めた以上、栄養は摂っておかなきゃ。食べる物、家に何かあったっけ。



「彼女は どうするの?」

『燃やしてしましましょうか。高温で焼いて骨にして砕いてしまえば証拠は残りません』

とある海岸。私の目の前には、一人の少女の遺体があった。別に私が殺したわけじゃない。崖から飛び降り自殺した学生で、孤児で身寄りもない少女。都合のいい事に、学生証と保健証を持っていた。勿論、それが犯罪だなんて事は分かってる。復讐だと気付かれない為には、私には三好友愛を捨てる必要があった。

『学生証は私が偽造します。この程度なら造作もない事です。貴女は偽造した学生証と保健証を持って整形に行ってください』

「分かった。軍に所属している人間なら、私の顔を知ってるかも知れないものね」

そう。顔も変えないと危険。海軍には、私が知らなくても向こうは

私を知ってるなんて人も必ず居る。例えば、長年海軍に協力してきた田尻財閥の一人娘とか。彼女はどのような心境でなのか分からないけれど、艦娘になったって聞いた。

まあ、テレビに出ちゃった私の事なんて海軍関係者なら殆んどの人には知ってるだろうけど。

「執刀した美容外科医はどうする？変える前の私の顔を知ってるわけだし方が一って事も考えて殺した方がよくない？」

『それなら、アルコールを過剰摂取させて海にでも突き落としましょう。事故で処理されれば調べられる事も無い筈です。高濃度のアルコールは私が精製して摂取させますから』

妖精なら、普通の人にはその姿は見えない。こういう作業にはうってつけね。

殺人に抵抗？そんなもの今更あると思う？だってこれから私が行おうとしているのは、無差別大量殺人だし。一人も一億人も変わらないでしょ？ねっ？

私と妖精はこれから海軍に入る予定。海軍に入って艦娘になり、彼らの元で練度を上げる。できるなら同士を見つけたいし、内部情報を把握してチャンスを探う。必ず手はある。私は諦めない。例えば先に指揮系統を、提督を全員殺害するとか。でも私の由良としての、艦娘の力は強く無い。策を練る必要がある。

それから数日。私は学生証にある住所の、狭く古いアパートの一室に居た。

別人の戸籍、別人の顔を手に入れた。先ずはこの学生証の少女の経歴を覚えなとね。

でも本当に腕の良い美容外科医だった。顔の骨格が似ていたとは言え、私の顔を学生証の持ち主の少女ソックリに整形したんだもの。元々ある学生証でも充分通じる。整形後に新たな学生証を偽造する必要は無さそう。

敬治さんとの思い出の詰まった私の顔を捨てるのは心苦しいけれど、これも敬治さんの仇を取る為。それに新しい顔も綺麗だし悪くな

いんじゃない？

髪はどうしよう。今は肩甲骨の辺りまでの長さがあるけど……このまま伸ばそうかな。決意を込めて、目的を遂げるその時まで。

……ちようどその頃に海軍は私を探していたみたい。復讐を嗅ぎ付けたとかではなく、私を保護する為。私が街の住人達から虐げられていた事や頼れる人間も誰もいない事も掴んだらしい。ほんっと、無能な連中。今更遅いのよね。でも保護されなくて良かった。もしそうになったら、復讐の機会も失われてしまう所だったもの。ありがとう、ウスノ口な上層部。これだけは心からお礼を言わせてもらう。

回想5

着替えや最低限の身の回りの小物類を詰めた安物のポストンバッグを手に。横須賀鎮守府までは東京から電車を乗り継いで1時間ちよつとの道のりだった。電車なんて本当に久しぶりに乗ったかな。だって高校までは徒歩で通えるし、移動といえばウチの車か敬治さんの車だったから。え？安物のポストンバッグ？だってこの戸籍の持ち主の少女が高級ブランド物のバッグをあれこれ持ってたからおかしいでしょ？

道中に妖精と話す時はわざわざスマートフォンを取り出して、通話しているフリをして話した。普通の人に妖精が見えない以上、何もせずに妖精と話すと独り言を繰り返す変な人に見られるから。何があるか分からないし、なるべく道中の人達に私の印象を残したくない。

手持ちの資金にはあんまり余裕もない。三好友愛のお小遣いは整形手術に大半を使っちゃったし、この顔の本当の戸籍の持ち主「佐藤みのり」の貯金は大した額が入ってない。父さんの財産は差し押さえられてるし、三好友愛の貯金に手を出せば私の身元と居場所がバレるかも知れない。だからもしもこの『直談判』が駄目だったら次のチャンスまで食い繋ぐ手段を考えないといけない。

「バイトかあ……やっておくんだったなあ」

当初はすぐに艦娘になれて、すぐに復讐に行けるって思ってたもの。お金の事なんて考えて無かった。

海軍大臣の娘だった私にバイト経験なんてある筈無いし、父さんに頼んだところで絶対にさせてもらえなかっただろう事くらい分かってる。でも人間何が役に立つかなんて本当に分からないし、せめて体験くらいさせてもらうんだったなあ。

『大丈夫ですよ。彼等は貴女を拒否したりしません』

私とは違って自信満々の妖精。艦艇の魂を内包した艦娘候補っていうのは人間の中でもほんの一握りで、探しても見つかるものじゃないからだって。私みたいに向こうから来てくれるならこれ程楽な事は無いみたい。

右肩に妖精を座らせ。緊張しながら。基地を取り囲む壁に設置されたゲートへと向かう。どうか何事もありませんように……。

「すみません、艦娘になりたいんですけど」

ゲートの右の所に設置してあった受付？の中に居た男の海軍軍人さん……制服を着てるしそうだと思うんだけど……に思いきつて話しかけてみた。

「お嬢ちゃん、艦娘っていうのは誰でもなれるわけじゃ無いんだよ。年に2回選抜試験があるだろう？それを受けてから来なさい」

軍人さんはそう言つて取り合つてくれない。確かに年に2回、希望者の中から艦娘を選抜する試験が開催されていた。筆記試験や面接なんかを行つてみたいけど、でも結局の所それは妖精が見えるかどうかを見極める為だけに行われてるわけだし。今まさに妖精が見える私には必要ない事。それに、クーデターもあつたし後処理なんかもある筈だから今年のぶんは開催されるかどうか分からない。もしもここで諦めたら私が艦娘になれるのは最短でも1年後……そんなに待てない。少しでも早く彼の仇を討ちたいのに。「分かったら行きなさい。此処は一般人が立ち入つていい所じゃない」

あからさまに早く何処かへ行けと指示してくる軍人さん。もうっ、どうして妖精が見える人を受付にしてないの!?!どうしよう、ここまで来て戻るのは……。

私がある場で躊躇して立ち止まっていると、突然軍人さんが敬礼。あ、肘を挙げない海軍式の敬礼。私だつてそれくらいの事は知つてる。父さんがよくやってたもの。軍人さんの視線は私じゃなくてゲートから出てくる人に向かつてる。上司かな?…つて思つて視線を向けてみると、およそ軍人らしからぬ美少女が居た。

私の一つか二つ年下っぽい幼さが見られるし、背も私より幾分小さい。金髪にお団子ツインテール、そのお団子の部分に髪を輪っかにして固めてある時間が掛かりそうな髪型。何処かに出掛けるのか、軍人の制服じゃなくてグレーのパーカー、中に紺のロングTシャツ、ミニスカートに紺のタイツ。右肩には赤い大きめのバッグ。

……なに、この子。どうしてこんな子が鎮守府に居るの？父さんや彼が守っていた海軍を舐めてるのかな？許せない。

私はそんな怪訝そうな視線で彼女を見つめていた。彼女はそんな私と軍人さんの様子に気付いたみたいで、此方に近付いてくる。

元気の良さげな、人一倍キーの高い声の彼女は受付の軍人さんに「お疲れ様です！どうかしたんですか？」って声を掛ける。彼女の声は耳に残りそう。

「丁度良かった。阿武隈さん、この子が艦娘になりたいらしいんですよ」って、この軍人さん『説得して早く帰らせろ』ってオーラが凄い。私、そんなに邪魔？

阿武隈、って呼ばれた彼女は私を繁々と眺める。やがて彼女は私の右肩に気付いた。そう、座っている妖精に。

「あれ？妖精さん？そんな所で何やってるんですか？」

『……阿武隈、ですか。見ての通り、彼女を艦娘にする為に連れて来たんですよ』

妖精は顔をあげながら、表情を一切変えず感情の揺れも見せない一定のトーンでそう話した。そうよね、私も見習わないと。常に冷静に、心の中は絶対に知られないようにしなきゃ。

それと、阿武隈って呼ばれたこの子「エッ、この人ですか？」って驚いてる。私が艦娘になるの、そんなに意外かな？この阿武隈って子の方が余程軍人っぽくないと思うんだけど。

『そうです。私の見立てでは彼女は由良の筈です。案内をお願いできませんか？』

「そうなんですか！案内すればいいのね！任せて任せて！」

由良、って名を聞いた瞬間から阿武隈のテンションが見るからに上がった。彼女はポカンとしている軍人さんに「それじゃあ、アタシはこの人を案内してきますね！」って言って、私の右手を掴んで引張ってゲートの中へ。その間、この阿武隈は終始笑顔。なんなのだろう、この馴れ馴れしさは。不快極まりない。

「艦艇としてはアタシが妹だけど、艦娘としてはアタシの方が先輩ですからね！あ、そうだ！由良お姉ちゃんって呼んでもいいですか？姉

妹艦はみんな別の鎮守府にいるからあんまり接点無くって。アタシ、一人っ子だったからお姉ちゃんに憧れてたんです!」

貴女が私の妹? 冗談でもそういう事言わないで。私の大切な人の仇の中の1人を妹だなんて思えるわけないじゃない! 本当なら今の場で殺してやりたいくらいなのに。

『落ち着いてください。この程度で目くじらを立てていてはこの先やっていけませんよ。貴女は先ず感情のコントロールを覚える事です』

私の心情を察した妖精が、小声で囁いた。阿武隈には気付かれていないみたい。……分かつてはいるんだけど。実際に目の前にするとやっぱり感情を抑えられない。落ち着いたら笑顔の練習もしておかないとね。このぶんだと復讐が終わる頃には女優になれるかも知れない。まあ、そんな特技を得た所で女優なんて興味無いけど。

そんな私達を他所に、ご機嫌で私の手を引く阿武隈に連れられて。私は鎮守府の敷地内を小走りで移動する。思っていた以上に広い。それに、あちこちに海軍の施設が立ち並んでいる。一つの大きな建物に色んな部署が入ってるってわけじゃ無いんだ。

「見えてきました! あそこが横須賀鎮守府庁舎です!」

阿武隈の指差す先には学校……というより役所といった感じの、三階建ての大きな建造物。あれが……あそこに仇の親玉が……。つと。いつの間にか怒りで目尻がっつり上がっていたのに気付いた。そうだった。怒りや憎しみは隠さないと。ええと、何か楽しかった事とか考えよう。そうね……。

私の脳裏は、どうやつてもあの時の事を思い出す。精一杯の勇気を振り絞った、敬治さんとの最初で最後のキス。こんな事になるんなら、もつと早く踏み出していけば良かった。あの人が、私を残して死のうなんて思えない位に肌を重ねておくべきだった。

不意に阿武隈がこちらを振り返った。

「あつ、そうだ! 由良お姉ちゃんに敬語っていうのも変ですよね! これから敬語じゃ無くても大丈夫……って!?! 何で泣いてるの!?!」って私を見て焦ってる。涙……そっか、私、泣いてるのか。

「大丈夫。何でもないから。ねっ?」

「本当に? 由良お姉ちゃんがそう言うなら、いいけど……」

涙を拭って、阿武隈に笑顔を作って向けた。これから敵の親玉に会うんだもの。泣いてなんていられないよね。

……大丈夫。阿武隈にもいつか味わわせてあげる。貴女も大切な人と永遠に離れ離れにされて、孤独と絶望を感じながら苦しんで死ぬるようにしてあげるから。ねっ?

まだ心配そうにしてる阿武隈に「うん、大丈夫」って念を押して、庁舎へ向かう。その入り口に差しかかった辺りで、誰かに後ろから声を掛けられた。私が、じゃなくて阿武隈が、だけど。

「阿武隈さん? 外出したのではなかったのですか?」

「あつ、大鳳さん! それがですね、艦娘候補の人が来てるんです!」

阿武隈に大鳳、と呼ばれた少女が私の顔に視線を向けた。茶色がかったショートボブの黒髪、頭にはヘッドギア? 赤いミニスカートにスパッツ、お腹のは……何だろう? 剣道の胸当てとは違うし……。それにしても上半身の白い服が薄く薄い。

艦娘ってみんなミニスカートにスパッツなのかな? 誰かの趣味とか? まさか敬治さんの……って事は無いよね?

身長が阿武隈と同じくらいの彼女も『けいじゅんようかん』って艦種なのかな? 阿武隈と仲良さそうだし。

「この人が? 珍しいわね。はじめまして。航空母艦の大鳳よ。提督の秘書艦をしているわ」

大して疑問を感じる様子も無く自己紹介をしてきた彼女。こうく……うぼかん? けいじゅんようかんとは違うの?

それにしても。こんな私の年下っぽい子が秘書? 横須賀の提督は好みの少女を侍らす為に父さんを追放したって事? そんな事で父さん達を……絶対許さない。殺してやる殺してやる殺してやる殺してやる……。

『由良』

妖精の声で我に返った。そっか。まだ我慢……我慢しなきゃ。今の私じゃ、きつと秒で取り押さえられるのがオチ。もつと力をつけ

て、もつと条件を整えてからじゃないと。
私は、内なる憎悪を必死に抑え続け続けた。

回想6

「由良お姉ちゃん、また後でね!」

少し遠くから両手を少し大袈裟に振り、笑顔を向ける阿武隈。本当に不快極まりないけど、それは心の奥に隠し私は精一杯の笑みを返した。今の私の表情、変じゃないかな?ちゃんと笑ってるように見えるかな?

阿武隈は私達の向かう方向とは真逆の、鎮守府のゲートの方へと戻っていく。私に会わなければそのまま街へと繰り出していた筈だったものね。ま、どうでもいいけれど。

「ごめんなさい由良さん。困惑したかも知れないけれど、阿武隈さんはみんなを引っ張らないといけない立場だから……彼女が甘える事が出来る人って少ないの。新人にこんな事頼むのは変かも知れないけれど、もし良かったら此れからも彼女の『お姉さん』でいてあげてくれないかしら?」

大鳳はそう言って苦笑いを浮かべてる。私のぎこちない笑みをそういう風に都合良く捉えてくれたみたい。

正直彼女の私的な面倒とか嫌だし立場とか本当に興味無い。でも『変に断ったりして後で面倒事になるよりは、あまり問題を起こしたりして目立たないように『いい人』を演じておいた方がいいですよ』って初代雷の妖精が大鳳には聞こえない程度の小声で私に耳打ち。

妖精の言葉も確かに一理ある。周りの全員に『いい人』って認識されていれば、万が一何かあっても私が疑われる確率は下がるかも。

「分かりました。彼女の力になれるように頑張ってみます」
「ええ、お願いね由良さん」と笑う大鳳。

うん、今度は我ながらうまく笑えたと思う。演技も少しずつ、地道に磨いていかないと。ねっ。

「さてと。それじゃ行きましょう」という大鳳に先導され、建物の中へ。仇敵に会った瞬間我を忘れて掴み掛かったりしないように気を張っておかないと。落ち着いて、私。落ち着け、落ち着け……。

握り締めた手に、汗。こんなに緊張したのは何時振りだろう。高校

受験の時以来かな？入口のすぐ脇ににある応接室？に一先ず通された。大鳳は「ここで少し待っていて」と、私の提督との面会許可を貰う為に一人で先に執務室へ行った。

応接室の中はそれほど大きくない。曇りガラスの窓が一つ。部屋の真ん中にソファがあつて、壁際に柵が部屋をぐるつと囲むように配置されてる。あ。あそこに写真が飾つてある。海上を走る、所謂「艦装」を背負つたピンク色の髪の少女の……あれ、誰の写真だろう？
『……………漣』

私の肩に乗つたままの初代雷の妖精がポツリと呟いた。あ、そうか。あの写真の子が例の『英雄』か。チラリと見る限り妖精は表情が曇つてる。今は私しか居ないからいいけれど、大鳳が戻ってくる前に元に戻つておいてね？

余計な話をして誰かに聞かれても困るから、特に会話もせず。静かに時間が過ぎるのを待った。10分くらい後かな、ノック音がして扉が開いた。勿論、迎えに来たのは大鳳。

「お待たせしたわ。行きましようか」という大鳳の言葉に、私は立ち上がった。大鳳が私に背中を向けたのを見計らつて、気付かれないよう深呼吸をする。取り乱すな私。まだ。まだ早い。今は名前を顔を一致させるだけで充分なんだ。取り乱すな私。

応接室を出て。私の先を歩く大鳳がとある扉の前で立ち止まる。『執務室』とかかれた、学校の教室を示すようなプレートが扉の右上の壁に付いてる部屋。ここが、執務室か。

大鳳はノックをして「大鳳です、入ります」と一言。中からは「ああ」と男性の声で返事があつた。声の主が、あの木村……父さんや敬治さんの仇……。

沸き上がってくる怒りや殺意を必死の思いで押さえつけて。私は大鳳に言われるままに部屋へと入った。中に居たのは多分30代の男性、背は170くらいかな？顔は……まあ普通だと思う。敬治さんの方が余程カッコいいもの。海軍の制服に身を包んだ男。多分この男が木村。「提督」って大鳳が声を掛けてるし。

やつぱりだった。「はじめまして。ここで提督をやってる木村だ。

君の事は大鳳から聞いてる。宜しく頼むよ」って私に挨拶してきた。殺したい気持ちをお隠し、私はこいつに作り笑いを向ける。どうか殺気を気付かれませぬように…………。

私の挨拶は「宜しく願います。佐藤み…………。」という所で木村に「ストツプ」と遮られた。何？何か問題があったっていうの？まさか私の正体がバレたんじゃ…………。

「ああ、済まない。軍規で『艦娘の詳細なプライバシーの公開禁止』つてのがあってな。ここでは本名ではなく『由良』で通してもらおう」

ホツとした。そういう事ね。ならきつとプライベートな事でボロが出る、って状況にもなり難い…………運も私に味方してくれてる。大丈夫、きつと上手くいく。

「軍規やら書類やら由良に目を通してもらいたい物は山ほどあるんだが、話は艦娘として覚醒してからだ」

「分かりました、木村提督」

表情を作り笑いから引き締めたものに変えて、私は頷いた。艦娘…………これでやつと一歩。待っててね、敬治さん、父さん、母さん。みんなの仇が討てるの、もう少しだから。

突然「入るぞ」って声が聞こえて、私は後ろを振り返った。扉が開いて入って来たのは、木村と同じ制服を来た男。

木村より随分背が高く、身体つきもガツシリとした、鋭い表情の男。

あ、その隣にスラリとした長身でスタイルの良い綺麗な女性が寄り添うように立っている。膝くらいまである長い髪をポニーテールにした、肩の露出した白い前留め式のセーラー服？の上着に下は両腰の部分で露出した赤のミニスカートの女性…………首に掛かっているのは菊花紋章…………あれ？ちよつと違う？桜の紋章？

私の視界ギリギリに入ってる妖精の表情が硬くなったのが分かった。まさか初代雷の妖精が知ってる人？

『大和です』

全員に気付かれないような本当に消え入りそうな小さな声。妖精は確かに『大和』と言った。大和って確か、南方棲戦姫になった女性

に降ろしたっていう艦艇の？

大和の隣に立つその男が「野良妖精とは珍しい。それと由良、か」って私に近付いてくる。え？何？まさか私、何か不味い事でもしたの？

その男は私の両目をじっと見つめている。時間にして十秒くらい。目は合わせたままの状態で、男は私に低い声で問い掛けてきた。

「お前は どうして艦娘になりたい？そんなに奴らが憎いか？」

狼狽した。自分では内に隠していたつもりだった憎しみを、この男はアツサリ看破したんだもの。この男は危険だ。それに下手な事を言えば私の計画はここで終わるかも知れない。震えて声が出てこない……………。

木村の「それくらいにしてやれ、東郷。深海棲艦に親しい人を殺された人間なんてゴマンと居るだろう？」という言葉で、男が私に向けていた威圧感が解除された。そうか。この男が東郷……………。

「お前が深海を憎むのは構わん。だが艦娘になるならお前の感情は抑えろ。それが出来ないというのなら家に戻れ」

そう言つて東郷は私を睨み付けた。正直、助かった。東郷は私の感情が深海棲艦に向いてると思ってる。心を見抜かれた時はどうなるかと思つたけれど、それならやりようはまだある。

「分かりました、東郷さん。大丈夫です」

出来るだけ心を落ち着かせて返事をした。東郷も「そうか」って納得した様子。

ふう、どうにか乗り切った……………のかな？

やっと私から離れた東郷は「大和、由良を工廠へ案内してやれ。後は俺と木村で決めておく」って隣の大和に指示を出す。大和は「分かりました、提督」って頷くと、私の方に視線を向けて微笑んだ。

「それでは由良さん、ご案内しますので此方へ」

今度は大和に先導され、私は執務室を退出。艦娘として覚醒する為に工廠へ。

私が退出し離れた後の執務室内では、東郷と木村が私の事とこれからについて話をしていた。

「由良の目には復讐の色が濃く見えた。後々アレ自身の命を危険に晒す種になりかねん。木村、由良の事は注意して見ている」

「分かった。気を付けておこう。それと話は変わるが、やはり私が表に出るのか？正直言おうと政治は面倒なんだがな。東郷の方が向いてるだろう？」

「馬鹿を言え。政なぞ俺の性に合うものか。それに俺が呉から表に出れば『出世の為にクーデターを起こした』等と言われかねん。だから俺も山本も大きな出世はいらん」



今度は大和の先導で、工廠へと歩く。

「あの、大和さん」

大和に声をかけてみた。特に会話したいわけじゃないけれど、ずっと沈黙っていうのも変だしね。

「はい、何でしょうか？」

「艦娘に覚醒するのってどのくらい掛かるんですか？」

大和に聞く必要の無い、けれど当たり触りの無い質問。妖精に聞けばそのくらい教えてくれるのは分かってるけど。

「そうですね……由良さんなら1時間、という所ではないでしょうか。私の時は8時間掛かったのでそれに比べれば直ぐですよ？」

私の建造時間は大和の1/8……。艦娘の強さが建造時間に比例しない事を祈りたい。でも何となく分かる。大和は私の復讐を実行する上で優先的に排除しなきゃいけない艦娘だって事が。

さて、他には何を聞くべきだろう。プライベートには踏み込まないとして、大まかな組織……は後で幾らでも軍の詳細な情報は得られるか。そうなると各提督の評判とかかな？東郷と一緒に居たって事は上の方ともそれなりに会ってるだろうし。でもまずは東郷の情報からかな。

「聞いてもいいですか？東郷さんはどういう方なんでしょう？」

「提督ですか？ええと……ちよっと変わってるけど良い方ですよ。」

呉のみんなからの信頼も厚いですし。何より人を見る目は確かです」
成る程ね。呉鎮守府の提督で要注意人物ってわけね。さっきの事

もあるし、東郷にあまり深く関わるのは危険か。普段はある程度距離を取る事にしよう。殺すなら暗殺とかかな？

……？何だろう？東郷を語る時の大和の態度。何だか嬉しそうな……。あ、そう。そういう事ね。大和は東郷の事……。覚えておけばいずれ役に立つかも。

そんな事を考えているうちに、眼前に海の広がる大きな施設、横須賀鎮守府海軍工廠へと着いた。一度はやられたけど父さん達が再び深海棲艦に対抗する為に苦心して復活させた施設……。

私の肩に乗ってる妖精は少し緊張した様子。もしも初代雷の妖精の事を知っている筈の初代漣の妖精がまだ居たら……。そうだ、一応聞いておこう。

「あの、大和さん。『英雄』と一緒に居た妖精さんには会えたりしますか？」

「あの子なら、今は横須賀には居ませんよ。重巡洋艦の足柄さんと行動を共にしているので、今度会えるとしたら……。何時だろう……。」

チラリ、と妖精に目を向けるとホツとした表情が見える。もしも初代漣の妖精がここにいるなら、初代雷の妖精には別行動を取ってもらわないといけない所だった。

……。その日。私は人間ではなくなった。艦娘という別の何かになつた。